

平成三十年度伊達市民憲章 作文コンクール受賞作品集



福島県伊達市

作品集発行にあたって

伊達市長 須田 博行

昨年度から取り組んでおります伊達市民憲章作文コンクールは、次代を担う市内の小・中学生の皆さんが、作文を通じて市民憲章の意味を捉え、自分の将来や伊達市の未来についてよく考える機会となるとともに、この作文を書くことで、ふるさとへの愛着心を育み、心豊かに成長してほしいという願いを込めて実施しております。

伊達市民憲章は、伊達市合併10周年を機に、まちの一体感をつくりあげ、目標を共有し、市民の皆様とともに力を合わせてより良いまちづくりを進めていくための行動規範として作られたものです。

今回は、市民憲章の一つである「つながましよう 世代の絆とたしかな信頼を」をテーマとして作品を募集したところ、小学生部門と中学生部門あわせて411点の応募がありました。自らの体験をもとに、ふるさとの伝統文化に対する想いや、地域との関わりを通して得られた絆など、まつすぐな視点で書き上げられた素晴らしい作品ばかりでした。

伊達市民憲章には、市民一人ひとりが自分のまちをより良くするために、「自分にできること」を具体的に自覚し、できる範囲で実行しようという思いが託されています。応募作品を読み、小・中学生の皆さんが、市民憲章の根本的な意義について理解し、「伊達市の未来をより良くするために自分たちが何をするべきか」と、真剣に思いを巡らせている姿勢に感動いたしました。

本作品集が多くのの方々の目に触れることで、市民憲章を身近に感じ、ふるさと伊達市への愛着がより一層高まることを切に願っております。

結びに、本コンクールの実施にあたり、児童生徒の皆さんをご指導いただきました先生方、多くの作品を真剣に審査いただきました皆様、そして、ご協力いただきました関係者の方々に感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

目次

作品集発行にあたって

伊達市長

須田 博行

1

小学生の部

5

【最優秀賞】

心から心へ―つながる絆―

伊達小学校 六年 大山 峻

【優秀賞】

ふるさとのししまいを守るために

大石小学校 六年 大橋 陸

もつとみんなと関わって

栗野小学校 五年 佐藤 滢

地いきの人と関わるということ

栗野小学校 六年 渡邊 凜咲

次の世代につなぐ太鼓祭り

掛田小学校 五年 長正 万穂

【佳作】

つないでいきたい伝承太鼓

小国小学校 五年 菅野 忠遼

世代のきずなを深めるために

石田小学校 六年 渡邊 楓華

これからの小手を考える

小手小学校 六年 斎藤 城宇

よりよい伊達市にするために

上保原小学校 六年 大橋 青空

中学生の部

【最優秀賞】

音楽を通して

伊達中学校 三年 吉田 桃香

【優秀賞】

地域のつながり

松陽中学校 二年 関根 葵

世代の距離を無くす長岡天王祭

伊達中学校 一年 菅野 美緒

つなげる地元の伝統

松陽中学校 三年 野田 勇希

地域の絆

月舘中学校 一年 齋藤 颯斗

【佳作】

愛すべき伊達

伊達中学校 二年 渡邊ひなた

私の故郷

松陽中学校 一年 紺野 真白

未来へ残したいこと

桃陵中学校 二年 大橋 結依

地域の繋がり・小さな事から

月舘中学校 三年 三浦 千穂

講評

審査委員長 高野 保夫

伊達市民憲章

30

28

小学生の部



最優秀賞

心から心へ——つながる絆——

伊達小学校 六年 大山 峻

ぼくの家の近くに、伊達中央交流館がある。二階建ての建物の中には、広い講堂や会議のできるちよつとした部屋がある。自由に学習できるスペースもある。そして何と言っても、ぼくたちのことを第一に考え、日々活動してくださっている先生方が、いつもここで優しく迎えてくれる場所でもあるのだ。ここは、ぼくにとって、学びの場を与えてくれる第二の学校のような存在である。

交流館では、さまざまなイベントが開かれる。子ども農園、もちつき教室、門松づくり、ちまき教室、巣箱づくり教室、だんごさし、竹鉄ぼうづくり……。どれもこれもなかなか家族だけではできないようなもののばかりだ。その中でぼくは子ども農園に参加した。子ども農園は、毎月第二、第四水曜日に開かれる。交流館裏の畑で、いろいろな野菜を栽培し、収穫する。収穫した野菜を使って料理し、みんなで食べることもある。自分たちで作った野菜で調理すると、格別おいしく感じるのだから、不思議だ。きれいな野菜も平気でぺろっと食べられてしまう。そればかりではない。野菜についての豆知識や育て方のこつ、簡単な調理の仕方なども、ていねいに教えてくださる。生きていくためには必要な

ことがたくさんある。生活の知恵だという。ときにはぼくが両親に教えてあげることもたくさんあって、ちよつとした自慢の一つになっている。

この夏は、恒例のキャンプにも参加した。このキャンプは毎年夏休みに行われている。場所は国立花山青少年自然の家、野生の生き物やめつたにみられないような植物が生えている自然豊かな所だ。二泊三日の中で、ぼくが一番心に残っているのは、野外炊飯だ。飯ごうを使った炊飯の仕方やイワナの内臓の処理の仕方、防災食づくり、そして火のおこし方を学んだ。一番難しかったのが、火おこしだった。実際にやってみるとうまくつかず、すぐに火が消えてしまい、がっかりの連続だった。そんなとき先生方は、ていねいにこつを教えてくれる。ぼくができるようになるまで、ていねいに最後まで見守ってくれている。おかげで生まれて初めて、自分で火をおこすことができた。この三日間で、ぼくも少しは成長できたように思う。ふだんはあまり言う機会がないが、交流館の先生方には、いつも心の中に感謝の気持ちを持っている。いつかきちんと、「ありがとう」の言葉を伝えたい。

ぼくたちの伊達市には、ぼくたちをまるで我が子のように大切に思っていて活動している方がたくさんいる。ある日、こんな言葉を聞いた。

「子どもは街の宝だ。おれらが伝えられつことは、何でも教えつかんな。任せろ。」

何かとても心が温まる、たのしい言葉だ。

ぼくが学ぶことはたくさんある。これからこの街でたくさんの方のことを吸収し、次の世代へバトンを渡せるようにしていきたい。

優秀賞

ふるさとのおししまいを守るために

大石小学校 六年 大橋 陸

ぼくのふるさと、大石北又地区には、ぼくが生まれる前からずっと続けられているおししまいがあります。そのおししまいは、守っていかねければならない市指定の文化財になっていて、長い歴史があるそうです。

昔とちがって今は、地区に住む子どもの人数がとても少なくなっているのです、おどり子を七人集めるのもとても大変なことです。でも、おししまい保存会の人たちや、地区の人たちが、子どものいる家庭をまわって、いろいろな人たちにお願ひして、おどり子たちを集めてくれます。そんな大人の人たちの努力のおかげで、今年は、七人のおどり子でがんばっています。大人の人たちは、日中はそれぞれみんな自分の仕事をしていて、仕事を終えた夜にぼくたちの練習を見てくれるなど、北又のおししまいを守るためにとてもがんばってくれています。

ぼくは、近所の人にさそわれたのがきっかけで、幼稚園のときからおししまいを始めました。見ていると簡単そうですが、いざ参加してみると、おどりの種類もたくさんあって、一つ一つのおどり方を正しく覚えるのもとても大変でした。「おどり子」と言っても、ささら、軍配、太鼓、おしと四つの役割ごとに動きやおどり方がちがうので、保存会

の人たちがそれぞれに分かれて一生けん命に教えてくれました。そのおかげで、ぼくもだんだんとおどり方を覚えることができました。しかし、おどり方を覚えていたつもりでも、みんなで合わせておどると、互いの動きがずれていたりして、合わせるのにとっても苦労しました。今ではみんなが自分の動きをしっかり覚えて、合わせるができるようになりました。

ぼくたちがおししまいをひろうするお祭りは、一年間に四回あります。大石地区にあるいくつかの神社でおどるのですが、神社以外のいろいろな場所でもおどるので、終わるころにはみんなくたくたに疲れてしまいます。それでも、地域の人たちがぼくたちのおししまいを喜んでくれているので、またがんばろうという気持ちになります。それに、いろいろな人たちと出会ったり、話をしたりすることは、ぼくにとっても貴重な経験になっています。

今年のおどり子には、ぼくを含めた小学六年生が三人います。この三人が卒業してしまうと、残りのメンバーは、たった四人しかいません。四人ではおししまいを続けることができなくなってしまうです。新しい三人を見つけておどり方を最初から教えていくのも、とても大変なことです。

ぼくたち子どもと、北又地区の大人たちがみんなで力を合わせ、知恵を出し合って、これからもおししまいを守っていかねばいけません。ぼくもいつかは、保存会の人たちのように、おどり子たちに教えてあげながら、北又のおししまいを大切に守っていききたいです。

もつとみんなと関わって

栗野小学校 五年 佐藤 渥

わたしは、毎日の登下校中に、近所に住んでいる人達から、たくさん声をかけられます。

「おはよう。今日は暑いから気をつけてね。」

「おかえり。今日も暑かったね。」など、たくさんの人に、たくさん声をかけてもらいます。近所や地いきに住んでいる人達は、わたしの家族ではありません。それなのに、わたしのことを、とても気づかせてくれています。でもわたしは、はずかしい気持ちや素直になれない気持ちの時、せつかく声をかけてくれた近所の人に、何も言わずに通りすぎてしまったことがあります。その時わたしは、とても後悔しました。「地いきの人は、家族でもないわたしのことを気にかけて、やさしく声をかけてくれたのに、どうして何も言わなかったのだろう。」と。地いきの人達のやさしい気持ちをうらぎった気がして、自分のことがいやになりました。「わたしって、ひどい。」それからわたしは、「おはよう。」と言われたら、大きな声で「おはようございます。」と言うように心がけるようにしました。何も言わなかった自分より、心がとてもすっきりしました。すっきりすると、自然に笑顔になりました。今、わたしの目標は、「自分から進んで地いきの人達にあいさつをする」ことです。あいさつは、した

人もされた人も、とても良い気持ちになります。あいさつの輪をもっともつと広げて、あいさつがあふれ、みんなが家族のような伊達市になるといいと思います。

わたしの住んでいる栗野地区では、六月の終わりに「敬老会」があります。地いきの人達がフラダンスをおどったり、歌や太鼓をひろうしたりする、毎年こう例の、楽しい行事です。今年、栗野小学校では、わたしたち五年生が、日ごろお世話になっている地いきのお年寄りに、感謝の気持ちをこめたプレゼントをしました。一つ目は歌のプレゼントです。手話をつけて一生けん命歌いました。二つ目は合奏です。わたしはバスマスターを演奏しました。最後にハンドベルで「ふるさと」を演奏しました。わたしたちの演奏をきいてなみだを流している人もいました。演奏に合わせて歌ってくださいる人もいました。演奏しながら、わたしは、とても温かい気持ちになりました。演奏が終わった後、五年生全員で、

「おじいちゃん、おばあちゃん、いつまでもお元気で、長生きしてください。」と言うと、体育館中に大きな拍手がびびきわたりました。「いつもわたしにやさしく声をかけていただきありがとうございます。いつもわたし達を温かく見守ってください。ありがとうございます。」わたしたちの感謝の気持ちが伝わったような気がして、うれしくなりました。

栗野、そして伊達市がもっと素敵になるように、これからは、もっと素直に自分の気持ちを周りの人に伝えていきたいです。

地いきの人と関わるということ

栗野小学校 六年 渡邊 凜咲

私達の周りには、世代をこえてする活動がたくさんあります。

一つ目は、三世代ふれあい行事です。これは、私達の学校で行っているもので、昔の遊びを地いきの人達としたり、もちをついて食べたりします。遊んだことのない遊びも、地いきの大人の人や、おじいさん、おばあさんが優しくていねいに教えてくれます。私は、竹馬が好きで、三年間ずっとここで竹馬を練習していたら、地いきの人達の指導のおかげで、乗れるようになりました。ずっと練習のかいがあつて乗れるようになってとてもうれしかったです。

それから、もちをつくと、地いきの人達や、友達のお母さん達もきなもちとすいとん汁を作ってくれます。毎回おいしくて、すいとん汁はいつもおかわりしています。一年に一回の行事で、みんなも楽しそうに参加しているし、欠席者はあまりいません。私も毎年参加しています。私は人見知りだけど、気軽に声をかけられて、とても参加しやすいです。

二つ目は、おどり流しです。私が一年の時から参加している行事です。夏休みのお祭りや、地いきの人と参加者全員と伊達市の人達とぼんおどりをおどります。練習は、二回あるのですが、一回しか来なくても、一人一人、厳しく指導せずに、初めからみんなでおど

るので、周りの人達に合わせておどることができます。ぼんおどりを町でみんなでおどるなんてあまりないので、とても楽しいです。毎年行われていて、見るのも楽しいので、もし私が小学校を卒業しても、他の人達が受けついでくれるといいなと思っています。実際、今年初めて参加する人が数人いました。このように、みんなでおどる楽しさを知り、それを友達に広めて、いつまでもこの文化が続くといいなと思いました。

三つ目は、交通安全のことです。私達の学校では、週に二回ほど交通安全のため、地いきの人が立っていてくれます。その日は、安心して登校できます。その決まった日じゃなくても、自主的にやってくれる人もいます。私も、そんな優しい大人になって、何十年後に体を張って安全を守るように続けたいと思いました。

私は、今までたくさん地いきの人達と関わってきたと思います。前にとりあげたような行事ばかりではなく、いつも登下校にあいさつをしたり、運動会でいっしょに参加したりすることも、世代をこえる、大きな関わりだと私は思います。地いきの人達の関わりは、あいさつなどの小さなことでも大きなことと思っています。地いきの人達がやっている文化や伝統などは、しれっと見てきたけれど、大変で、私達のためにつくしてくれていると分かりました。この地いきの人達の大変さは分かりません。でも、地いきの人達の優しい心をこれからも受けついでいきたいです。

次の世代につなぐ太鼓祭り

掛田小学校 五年 長正 万穂

わたしが住んでいる伊達市には、小さい子どもからお年寄りまで、たくさんの方が住んでいます。伊達市では、お年寄りから次の世代のわたしたちまで、どのような伝統がどのように伝えられてきたのでしょうか。わたしたちは、これからどのように伝統を守り、伝えていけば良いのでしょうか。

伊達市の伝統といえば、毎年行われる「霊山太鼓祭り」です。今年で三十四回目になります。わたしが生まれる前から行われているお祭りです。太鼓祭りには、毎年各地域から太鼓をたたく人達が集まって太鼓をひろうします。太鼓祭りの日、会場は、霊山太鼓の勇ましい音がひびき、大勢の人々にぎわいます。

わたしも地域で太鼓を習っていますが、これまで太鼓について深く考えたことはありませんでした。でも、わたしが太鼓をふつうにたたけるようになったのは、地域のお年寄りが太鼓の伝統を守り、わたしたちに教えてくれたからです。

わたしはこれまで、何も考えず、ただふつうに太鼓をたたいていましたが、お年寄りはどうな気持ちで太鼓をたたいてほしいと思っているのか考えてみました。

太鼓の合同練習の時は、霊山太鼓保存会の方がたくさん太鼓をた

たいています。太鼓以外にも、笛をふく、かけ声をかけるなどたくさん役割があります。保存会の人達の演奏の様子を見ると、本当に楽しそうに太鼓をたたいています。本当は、保存会の人に

「なぜ、そんなに楽しそうに太鼓をたたけるのですか？」

と聞きたかったのですが、はにかしくて聞けませんでした。代わりに、楽しそうにたたっている友達に聞いてみました。友達は、「みんなで集まって、太鼓をたたくのはとっても楽しいよ。」

と言いました。わたしは、確かに、友達はわたしよりもとても楽しそうにたたっているなあと思いました。でも、わたしも習い始めた頃に比べると、つまづいたりまちがえたりしないで太鼓がたたけるようになっていくことに気づきました。今まで考えたことはなかったけれど、お年寄りの方たちも同じように霊山太鼓を地域の人から習って、次の世代にもつないで、ずっと守っていきたいと願っているのかもしれない。わたしも子どももいっしょに太鼓をたたくことによって霊山太鼓は守られ、そしてたくさんの方々を楽しませました。

わたしも習っている太鼓を次の世代につなぎたいと思いました。例えば、友達を太鼓にさそってみたり、小さい子どもにも太鼓の大切さを知ってもらったりできるようにするなど、わたしなりにできることをやってみたいです。そしてこれからは、もっと霊山太鼓を楽しんで、次の世代につなげていきたいです。

佳作

つないでいきたい伝承太鼓

小国小学校 五年 菅野 忠遼

ぼくの住む、伊達市霊山町には、三百五十年前から代々伝わる伝承太鼓があります。その太鼓の名は、「霊山太鼓」です。

ぼくの家では、先祖代々、太鼓を受け継いでいて、ぼくで五代目になります。震災以降、ぼくの住んでいる小国地区は、子供の数が減り続けていて、今年の小国小学校の生徒数は、たった十九人です。しかも、その十九人の友達の中でも太鼓をたたける人は、ぼくをふくめて五人しかいません。

このままの状態で、将来、霊山太鼓を守っていけるのか、ぼくは心配になってしまいました。

だから、将来、ぼくが地域の太鼓を守っていけるように、今生けん命、太鼓の練習をしています。

練習には、色々な世代の人たちが来ていて、地域のおじいちゃん達に太鼓のたたき方を教えてもらうことがあります。

おじいちゃん達は、たたき方のお手本を見せてくれたり、手を持っていつしょにたたいてリズムを教えてくださいました。

ぼくが上手に太鼓をたたけた時には、

「忠遼くん、上手だね。」

と、ほめてくれます。ほめられると、うれしくて、ますますやる気が出てきます。

今年の地区の盆おどりは、三月にオープンした霊山道の駅で行われました。道の駅には、地域の人達が協力して建てた、盆おどりに使う大きなやぐらや、地元の食材を使ったフードコーナー、売店もできていました。

夕方の盆おどりでは、ぼくもやぐらの上に登り、地域の人達といつしょに汗まみれになって、太鼓をたたきました。

盆おどりを思いつ切り楽しめたのは、地域のみなさんの協力があったからできたのだと思います。

太鼓はとても楽しく、みんな仲良くなれるので、もっとたくさんの人に太鼓をやってほしいです。

ぼくも、学校の友達をさそって太鼓で色々な人達とのつながりをつくりたいです。

太鼓を通して、色々な世代の人達とつながることができているので、ぼくは、地域の人達に見守られながら、安心してこの地域に住むことができているんだと思います。

本当に、この小国地区に住んでいてよかったです。

このすばらしい伝統がこれからもずっと受け継がれていけるように、ぼくは、たくさんの人から色々な事を学んでいきたいです。

伊達市にもすばらしい伝統がたくさんあるので、何百年先も続いていけるようにおじいちゃんおばあちゃん達に、たくさん事を教えてもらい、伊達市の将来を担っていけたら、伊達市は、もっともっと輝く市になれるのだと思います。

世代のきずなを深めるために

石田小学校 六年 渡邊 楓華

私の住む地域には「石田っ子クラブ」という集まりがあります。そこでは、昼ごはんをおばあちゃん達が作ってくれたり、逆に私たちが、おじいちゃんおばあちゃんにダンスを見せたりと石田っ子クラブは、子どもがおじいちゃんおばあちゃんのために活動したり、おじいちゃんおばあちゃんが私たちのために何かしてくれたり、ということがあるのです。

また、私はよく、友達と近所の交流館に遊びに行きます。私はその時、いつもねこが三匹いる家により道をしてしまいます。もしくは、その家に行くために友達と出かけることがあります。理由は、その家に住むおばあちゃんに会い、お話しするためです。おばあちゃんはとても優しく、いつも私たちと楽しくおしゃべりしてくれます。それだけでなく、そのおばあちゃんにおかしをもらうこともあります。他にも、私たちが交流館に行くところには、たくさんのおじいちゃんやおばあちゃん達が笑顔で、

「どこいくの。」

「気をつけて行ってね。」

と、話しかけてくれるのです。

私はそんな石田はたくさんの人と、とうめいの糸でつながっている

と思いました。

石田は、たくさんの人がとてもやさしいのです。みんながみんなをとても心配したり、助け合ったりしているのです。

石田には、さらに地域のつながりを深める「石田屋」というおいしいおまんじゅう屋さんがあります。その店は多くの世代に愛されている、あたたかいお店です。たくさん世代が来る石田屋は、石田のしょうちようなのです。私はそんな石田屋が大好きです。

私は、自分の住む地域がとても気に入っています。そして、さらに世代で助け合い、協力し合う家族のような関係にしたいです。

そこで、私はさらにこの地域の人々のつながりを深めるために二つのことを考えました。一つ目は、子ども達や大人がおじいちゃんおばあちゃんの家をまわって、子ども達で作ったプレゼントを渡して交流を深め、子ども達との思い出を作ってもらい、元気をあげることです。二つ目は、たくさん世代が集まって会話や昔遊びなどをして、おじいちゃんおばあちゃんに楽しんでもらい、仲よくなれるような行事を作ることです。いつか実現させたいです。

私は、地域に、あつてほしいお店もあります。それは、昔なつかしのおかしを販売しているだかし屋です。そのお店があれば、おじいちゃんおばあちゃんが昔を思い出すことができるし、一日が楽しくなるし、子ども達も昔のことを知ることができるからです。

こんな世代のつながりのある町になるよう、もっとおじいちゃんおばあちゃんと積極的に接し、世代のきずなを深めていきたいです。

これからの小手を考える

小手小学校 六年 斎藤 城宇

再来年に、小手小学校、月館小学校、月館中学校が合併となり、月館中学校の校舎を改築して、みんながそこへ移動します。そうすると、現在ぼくたちが使っている小手小学校の施設は使われなくなります。学校がなくなるということは、人が集まらなくなり、地域全体がさびしくなります。

今まで通ってきた小手小学校がなくなるのは、ぼくにとってもさみしいことで、合併後も月館町を明るくするために何かないかなと考えました。

それは、小手小学校を地域のために、うまく再利用することです。例えば、校庭を公園化して、もっと遊具を設置したり、プールを直して町のプールにしたりする。体育館をいろいろな団体に貸し出す。教室を地域のクラブ活動や習い事の教室とする。泊まりの合宿ができるように、宿泊部屋や食堂やシャワー室を設置するなどです。そうすれば、自然と人が小手に集まり、地域は活性化すると思います。

また、一人暮らしのお年寄りのために、食事会やお話を開いて、そこに子ども達も交ざれば、交流の輪が広がり、盛り上がると思います。さらに、移動が苦にならないように、料金を安くしてバスや

タクシーを地域でぐるぐると回すようにすれば、気軽に人が集まれるかと思っています。

次に、農村広場の活用法です。農村広場はとても広く、何の競技でも使えるので、半分は芝生のグラウンドにすれば、さらにいろいろな競技の人たちが使うようになるかと思っています。そうすれば、合宿に来る人も増えると思います。

何よりも、ぼくや先ばいたちが通った小手小学校がなくならずに、形を変えて、みんなのために再利用されることが、一番うれしくほこりに思うからです。また、月館町の新しい観光の目玉として、アビールできますし、今までになくたくさんの人たちが、ここ月館町に集まり、喜んでくれるかと思うとわくわくします。

そして、それがぼくたち地域住民のじまんとなり、月館町の人口も減らずにすむのかなと思います。

いろいろな目的を持った人たちが集まり、みんながこの小手を好きになってくれたらうれしいし、この地域も活性化するのではないのでしょうか。

ここまで述べたことが実行できれば、月館町の未来は明るいと思います。そのため合併は悲しいですが、これからの未来を考えるチャンスなのかもしれません。このチャンスを逃さずに、十年後、二十年後も人が集まり続ける地域づくりに向けて、準備をしていくことが大切です。今年のテーマ「つなぎましよう世代の絆とたしかな信頼を」を実現していくためにも。

よりよい伊達市にするために

上保原小学校 六年 大橋 青空

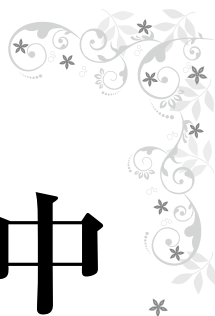
私は伊達市で生まれ育ちました。伊達市は自然ゆたかな所でそんな伊達市が私は大好きです。

この伊達市のよさを守っていくためには、私たち小学生や、地域の方々と協力していくことが大切だと思います。例えば、私の住んでいる町では毎月第三日曜日に駅のそうじを行っています。私もそうじに参加しますが、地域みなさんと協力して駅をきれいにするととても気持ちがよくなります。そして、このそうじを行うことでもう一つ、私がいいいなと思うことがあります。それは、地域の方々と自然に言葉を交わすことができるようになるということです。そうじをしていると、参加している地域の方々と顔見知りになることができます。笑顔で「こんにちは」と声をかけると、私も自然と笑顔になり、「こんにちは」と元気にあいさつをすることができますようにになりました。私の祖父は以前私に「あいさつはたった一言で仲良くなれるま法の言葉なんだよ。」と教えてくれました。祖父の教えてくれた通り、あいさつをする度に地域の方々と仲良くなるような気がしています。こうして、せいそう活動やあいさつを通して地域の方々との絆が強くなっていき、地域の方々の思いが私たちに引き継がれていくのだと思います。

もう一つ、この伊達市をよりよくしていくために必要だと私が思うことがあります。それは「気付き」「考え」「行動する」ということです。駅のそうじの時もそうですが、登校するときにも道路のわきにゴミが落ちていることがあります。また、公園に遊びにいくと、ジュースの空き缶やおかしの袋等のゴミが捨てられているのを目にする時があります。そんなゴミを見る度に、（なんでゴミをポイ捨てするのだらう）と不思議な気持ちになります。誰だって自分の家の庭にゴミを捨てられたいやな気持ちになると思います。みんなで使う場所にゴミを捨てるということは、あとで使う人のことを考えればできないはずです。そのことに気付き、少し考えることができればポイ捨てもなくなるのではないかと思います。ですが、私自身も、落ちているゴミを見つけた時に、（拾って捨てた方がいい）とは思ってもすぐ行動にうつせない時があるので、いいと思ったことを積極的にできるようにしたいと思います。そして、この伊達市をよりよくするためにどうしていけばいいか一人一人が考えて行動していくこと、相手の立場に立って考えて行動していくことが、必要だと思っています。

私はこの伊達市が大好きです。ゆたかな自然の中で、小さな子どもからお年寄りまでみんなが安心して暮らせる伊達市をこれからも守っていき、よりよい伊達市にしていけるように、私自身もより地域の方々と協力していきます。

中学生の部



最優秀賞

音楽を通して

伊達中学校 三年 吉田 桃香

夏休み、私は梁川で行われた夏祭りに参加した。広瀬川のそばで行われる夏祭りで、たくさんの人が訪れている。昼はいろいろなイベントが催され、夜は花火が打ち上げられたりと、一日中楽しむことができるお祭りだ。

私が参加したのは、「オラトリオ」というイベントだ。去年も参加し、今年で参加するのは二回目だ。「オラトリオ」とは、梁川の自然との共生を誓ったふるさと賛歌のことで、伊達市の音楽団体が演奏する。何しろ小学生からお年寄りの方まで百人以上の人たちで一つの音楽をつくりあげるのだ。形にするのはとても大変なことだ。

前日の夜に行われた合同練習では、たくさんの人たちと演奏した。合唱や吹奏楽、踊り、太鼓など…。吹奏楽ばかりやっていた私にはとても新鮮に見えた。私の周りはいつもの仲の良い友達ではなく、知らない大人の人が多かった。緊張していた私に、同じパートの人たちは、優しく声をかけてくれた。楽譜の確認など、気配りもしてくれた。練習は大変だったが、いろいろな人と話すことができて楽しかった。

いよいよ夏祭り当日の夜になった。演奏が終わった瞬間、花火が打

ち上げられるため、夜に演奏するのだ。広瀬川の石段には、石が見えなくなるほどたくさんの人が座っていた。市長さんや、実行委員長の話が終わり、曲が始まった。指揮棒と同時に音楽はゆるやかに流れていく。野外で演奏することはなかなかないが、とても気持ち良いと思った。曲は中盤にさしかかり、太鼓や踊りが披露される。やがて曲が終わり、一瞬の静寂。次の瞬間、割れんばかりの拍手が夜空に鳴り響いた。花火も華麗に咲き誇る。私は強い感動を受けた。たくさんの人で一つのものをつくり上げると、こんなに多くの人を感動させることができるのか。その後、私は周りの演奏者の人たちと少し話した。お互いの努力を労ったり、世間話をしたりした後、

「また来年会いましょう！」

と言ひ合ひ、私は帰途についた。

私は、この夏祭りからたくさんのことを学んだ。人々が力を合わせれば、大きな達成感や感動を得られること。世代が離れていても、心を通わせられること。私が人々の絆を深めるために最も必要だと思うのは、やはり地域のイベントやお祭りだと思う。「また来年」その言い合える場所が地域には必要だ。普段私たち学生や、働いている方、お年寄りの方では、日々の時間の過ごし方が全く違うといっても過言ではない。当然コミュニケーションも取りづらい。同じ時間を共有することで距離はグッと縮まると思う。そのためには、これからイベントやお祭りを次の世代が継承していかなければならない。これから私は、主体性を持ち、積極的に地域と関わる努力をしていきたい。

優秀賞

地域のつながり

松陽中学校 二年 関根 葵

伊達市には、世代を超えたつながりがたくさんあると思います。その中でも私が住む保原には、守り続けていきたいと思うつながりがあります。

それは、毎朝私たちの登校を見守ってくださっている、見守り隊の方とのつながりです。守り続けていきたいと思うのにはいくつかの理由があります。

見守り隊の方は、雨が降っていても、雪が降っていても、風が強くて、いつでも私たちの登校を見守ってくださいます。また、雷などで集団下校になったときには、下校も見守ってくださいました。そのおかげで私たちは、いつでも安心して登下校することができました。だから、自分の下の世代にも安心して登下校してほしいので守り続けていきたいと思っています。

さらに、見守り隊の方は、ただ私たちの登校を見守ってくださるだけではありません。いつでも、優しく接してくださいます。

私が六年生のとき、かぜで学校を休んでしまったことがありました。次の日、見守り隊の方の顔をあいさつをしながら通ると、「おはよう」というあいさつのあと、「かぜひいてたの？ 大丈夫だった？」と心配して

声をかけてくださいました。その言葉がとてもうれしくて、心があたたかくなりました。それ以来私は、かぜなどで学校を休んだ友達には、学校に来たときに必ず声をかけるようにしています。なぜなら、ちょっとした言葉であつても、私たちはうれしいと感じると分かったからです。見守り隊の方に教わったことを、私なりのやり方で受けついでいきたいと思っています。

私は実は、小学校四年生までは、あまりあいさつをしていませんでした。しかし、見守り隊の方にあいさつをされて、自分があいさつをしていないことが恥ずかしくなりました。そこで、少しずつですが、自分からあいさつをするようになりました。あいさつは、する方もされる方もうれしい気持ちになります。だから、これからも自分から積極的に元気なあいさつをして、あいさつの良いところを多くの人に伝えたいと思います。

中学生になると通学路が変わりましたが、今でも見守り隊の方にお会いします。また、小学生の妹と弟がいるので、見守り隊の方のことを尋ねてみました。すると、私の時と全く変わらず、妹や弟のことを見守ってくださいまことが分かりました。

このように、ずっと私たちのことを見守ってくださる地域の方がいるということは、決してあたり前のことではありません。とてもありがたいことなのだと改めて感じています。

これからも、見守り隊の活動をずっと続けてほしいと思っています。見守り隊の方も、病気になるったりけがをしたりせずに、お元気でいてほしいと願っています。

世代の距離をなくす長岡天王祭

伊達中学校 一年 菅野 美緒

私は、幼稚園生の頃から毎年天王祭に参加している。三年生までは太鼓を四年生からは笛をやっている。私の姉は私と同じ形で参加し、母は料理を作るなどお手伝いとして参加していた。

そもそも天王祭を知らない人も多いと思う。天王祭は伊達市で行われる大きなお祭りだ。このお祭りには伊達市の八方部の山車が集まる。長岡天王祭。これが正式名称だ。天王祭は老若男女問わず楽しめる。このお祭りには長い歴史がある。その中の伝説を紹介する。

昔、素直な子供がいた。その子供の母は重い病氣を持っていたが、医者頼めるほどのお金は持っていなかった。子供は母の病氣を治そうと毎日神社に行ってお参りをした。すると、ある日神の声が聞こえた。「そこにある桶の水をもって行って母に飲ませなさい。」子供は、神に従って行動した。桶の水を飲むと母はみるうちに元気になった。このことが町で有名になり、神の声が聞こえた日、その前日、その後の日に毎年お祭りをやるようになった。そのお祭りが天王祭だ。日付けとしては七月二十三日～二十五日までの三日間だ。今はないが、昔は桶を売る屋台がたくさんあったそうだ。

こんなお祭りを今年も楽しみにしていた。練習は友達や先輩と楽しくしていた。二十四日は友達と遊びに行く予定まで立てていた。

ついに二十三日になった。

早朝、一通の電話が掛かってきた。祖父が亡くなったという病院からの電話だった。私は祖父が亡くなったという悲しみで胸がいっぱいになった。伝説のように私が毎日神社に行っていれば、桶があればと思った。友達との予定も参加する日の予定も全てキャンセルだ。去年の天王祭の時は、祖父も私の笛を聞いてくれたのに……。病院から祖父が家に帰ってくると太鼓の音が聞こえてきた。夜になっても太鼓の音は鳴りやまない。祖父にも太鼓の音は届いているのだろうか。来年は笛や太鼓の音を祖父に届けたい。三日間鳴り響き続ける太鼓の音色はお祭り好きの私にはたまらなかった。やっぱり天王祭はなくてはならない行事だと改めて思った。若い頃、祖父も参加していたのだろうか。

天王祭は私が年をとっても続いていて欲しいと思う。普段しゃべらない他方部の人との交流の場、参加している人全員の気持ちが一つになれる年に一度の機会だからだ。私は、大人になってもこの町に住んでいるかは分らない。しかし、里帰りをしたときに天王祭に参加したい。前文でも述べたように、天王祭は老若男女問わず楽しめる。そして、年長者から若者へとそれぞれの方部の歴史が受け継がれていく。私もその歴史を受け継ぐ人、そしてその歴史を一人でも多くの人に広げていきたいと思う。長岡天王祭、やっぱり一年で一回の大きくて大切な行事だ。

つなげる地元の伝統

松陽中学校 三年 野田 勇希

僕は今、地元の太鼓保存会に所属しています。決して大きな団体ではありませんが、地元の盆踊りや秋祭りでの仕事を担っています。太鼓の練習をするだけではなく、クリスマスにはクリスマスパーティーを開いて子供達を楽しませることもあります。

太鼓保存会では、二つの問題を抱えています。

一つ目は、この団体に所属している人数が減少していることです。地元ではどんどん子供が少なくなっています。さらに、高校に進学した人達は、忙しくてなかなか練習に参加することができなくなります。そのため、他の地域から助っ人として習いに来てくれる人を誘うという対策をとりました。

その結果は成功して、四人の子供達が参加してくれるようになりました。今後も他の地域の人たちを募集していけば、少しずつこの問題は解決していくかもしれません。僕自身も、この団体に所属している者として、活動について学校の友達に紹介したり、練習に誘ったりすることが必要になっていくと考えています。

二つ目の問題は技術の低下です。昔は、幼い頃から習っていた人達が多く、とても高い技術を持つ団体でした。しかし、高い技術を持っていた人の中には、高校に入って練習に来られなくなった人も

いますし、就職して引退した人もいます。現在残っている人達は、ある程度の年齢になってから太鼓を始めた人が多く、以前と比べると技術が低下していることは否定できません。

この問題はまだ解決されていません。最近では、マンツーマンで教えている先生の姿も見られるようになりました。練習に来てくれる人が少ない時は、小さい子に一つ一つ丁寧に教えています。しかし先生の人数は三人しかいません。それを見て僕は、引退した人達が「先生」の立場になって、再び活動に参加してくれば、一度にたくさんの人が学べて、もっと効率が良くなるのではないかと考えました。効率が良くなれば、時間内であってもレベルを高くしていくことは可能だと思っています。

地元の太鼓保存会には、様々な年齢の人がいます。地元に伝わる大切な伝統文化を、大人の人達は今までずっと受けついできました。しかし、それを受けつぐ人がいなかったり、十分に受けつがれていなかったりしたら、その伝統は失われていきます。

僕が使っている「ばち」は、先輩のお父さんが作ってくださいましたものです。また、太鼓をのせる屋台はかなり古く、そういうところからも伝統を受けついでいるなと感じています。だからこそ、団体の伝統を絶やしたくはありません。自分の持つ技術をさらに高めていくことも必要だと思っています。自分が大人になったときに、自信をもって若い世代の子供たちに伝えていけるようにしたいと考えています。

地域の絆

月館中学校 一年 齋藤 颯斗

僕の住んでいる小手地区は伊達市の南はしにある。近所の人はみんなやさしく、いつもニコニコ笑っている。僕は、笑顔が大好きだ。そして僕の地域では小手の地域をもっと良くしようと三つの行事を行っている。

一つ目は、夏のはじめのあじさい祭りだ。このあじさいは二十年前に植えられ、今では地域の宝物だ。あじさいをよりきれいに咲かせるために、せん定をしたり、いらぬ雑草を取ったり地域のみんなで大切に手入れをしている。そして、祭りの計画を立てる。そこでは、地域の特産物やカフェなどの話し合いもする。六月の半ば、僕の家をどんどん上に進むと看板が見えてきて、やがて少しづつあじさいが見えてくる。進めば進むほど色とりどりのあじさいの量が多くなりとてもきれいだ。祭りは、今年で九回目で、震災で一時的中止したがみんなの協力で復活した。

二つ目は、おおみそかの花火大会だ。これは、おおみそかの夜十二時に暗い空高く花火を打ち上げられるものだ。公民館では温かい豚汁やそばが無料でふるまわれる。寒い中で食べる温かい豚汁は、体がポカポカと温まる。この花火大会は、近所の方がみんなに花火をやらうと声をかけて始まった。その花火を打ち上げるのに必要な

費用は、地域のみんなが協力してお金を出し合っている。また、それだけではなく、地域の消防団の人たちが万が一火事になったとしてもすぐに火が消せるように協力してくれていて、たくさんの人たちの協力で成り立っている。新年に地域のいろいろな人に会えるのも楽しみだ。

三つ目は、昨年から復活した薬師寺の復興盆踊りだ。盆踊りは、昔は毎年やっていたけれど、いつの間になくなってしまったと母から聞いた。実行委員長が昨年、盆踊りをもう一度やってみようと地域のみんなに相談して復活した。昔、祭りで太鼓や笛をやっていたOBが集まって教えてくれた。僕は、昨年はやぐらの下で小太鼓をたたいていたが、今年はやぐらに乗って小太鼓をたたいた。今年の練習中に僕はOBの人に、

「お前が太太鼓を覚えれば、小さい子に教えてまたどんどん広がっていくからがんばれ。」

と言われた。太太鼓は小太鼓を引っ張らなくてはならないので難易度が高い。今年は覚えられなかったが、来年こそはマスターしたい。

三つの行事は、地域の人たちの絆をつないでいる。子どもからお年寄りまで人と人とのつながりがある。思いやりや優しさがつながり、笑顔がつながっていく。僕も地域の一人として、つながりを大切にしていきたい。小さなつながりが、大きなつながりになって地域が元気に輝いていくと思う。

佳作

愛すべき伊達

伊達中学校 二年 渡邊 ひなた

私には、小さいころからずっと思っていたことがある。それは、近くに大きな公園が欲しいということだ。

保原には、保原総合公園。梁川には、やながわ希望の森公園。月舘には、月見舘森林公園。私が生まれ育った旧伊達町には、大きな公園がない。私はよく、保原総合公園に母と車で行く。そこでは、お昼ご飯を食べたり、散歩をしたりしている。ながめが良く、遠くの山まで見渡せる。だから、なんてことないおにぎりでも、とてもおいしく感じられる。小さい子どもが遊具で遊び、お年寄りはおウォーキングを楽しみ、私と同じようにお昼ご飯を楽しむ家族。いろいろな所から聞こえる、楽しそうな声。それらは、とても幸せなことだと感じた。広く、美しく整備された場所。は心を和ませる。こんなすばらしい公園が近くにあったらいいと思う。もし、このような場所ができれば、家族みんなで行きたい。そうすれば、母、祖母とも会話が増えるだろう。

旧伊達町に大きな公園ができれば、伊達市すべての町に公園ができる。そこで、市民の人に寄付をしてもらう。そして、自分達の手で植樹をする。そうすることで、親しみと誇りを持ち、大切に思える公園に

なるだろう。すべての町に大きな公園ができれば、その公園をつなぐイベントを企画することができる。伊達市は、合併したことにより、とても大きくなった。魅力的な公園が増えることで、お年寄り、大人、子ども、いろいろな人が集まり、地域全体の活性化につながるのではないだろうか。さみしい公園をなくし、笑い声が響くような公園を増やしたい。

この夏、全国各地が、大きな災害に見舞われた。考えたくないが、この伊達でも、いつ、何が起るかはわからない。そんなときの避難場所としても、いつも行っている大きな公園であれば、わかりやすく、市民の役に立つのではないだろうか。

私は、職場体験で、伊達市役所伊達総合支所での仕事を体験した。選んだ理由は、伊達が好きで、将来伊達をより良くしたいと思ったからだ。道路の整備などの「物」に関わる仕事から、成人式や立志式の開催などの「人」に関わる仕事まで、私達が住む伊達市のために働いている。私一人の力はとても小さいかもしれないが、伊達市を想う気持ちは強い。この気持ち、いつか役立つことを信じている。

お年寄り、大人、子ども、いろいろな人がいてこそ町だ。だから、それぞれが住みやすい町をめざしたい。伊達市にかぎらず、高齢化社会が進んでいる今、子育てをしやすい環境づくりが重要なのだと思う。高速度道路ができ、人の流れは変わると思うので、伊達に来てみたい、住んでみたいと思えるようになったら、どれだけすてきなことだろう。きっと、楽しそうな声があちこちから聞こえてくる。そんな伊達市が待っていると思う。

私の故郷

松陽中学校 一年 紺野 真白

「つなぎましよう世代の絆とたしかな信頼を」この言葉の中には、世代の垣根をこえて人々が連携し、望ましい信頼関係を築くことや、規律を尊重した安全・安心な地域づくりを目指そうなど、希望あふれた伊達市を愛する意味がこめられています。私はとてもいい言葉だと思いました。そしてこの言葉のとおり、伊達市はいろいろな活動をしていると思います。

私は今年、中学生になりました。そして、迷いに迷って決めた吹奏楽部に入りました。毎日が忙しいけど、とても楽しく活動しています。そして五月に、伊達市の吹奏楽部員全員と東京藝術大学の人達で行う演奏会がありました。その演奏会では、いろんな人と出会いみんなが一体になって、演奏していました。とてもいい演奏会だったなと思いました。これは、「望ましい信頼関係を築く」ことに、当てはまるのではないかと思います。

また、夏休み明けに行われる福祉体験で、私達は老人ホームに行きます。このことは、「世代の垣根をこえて人々が連体する」に当てはまると思いました。

しかし、私が忘れることはない三月十一日の東日本大震災。私もはっきりと覚えています。家族全員がそろった時は、とても安心しました。

でも、その裏で悲しい思いをしている人がたくさんいます。伊達市にもいるかもしれません。だけど、そこから立ち上がってみんながんばってきました。その努力があり伊達市は今のよう自然あふれる緑の町になったと思います。さらに福島は桃はとてもおいしいです。夏になると、桃がたくさん手に入り、とても幸せです。

でも私は、伊達市のために積極的に活動をしていません。そこで私は伊達市のために、何ができるのか考えてみました。

一つ目は、自分のやる事に精いっぱい取り組み、周りの人を笑顔にすることです。特にあいさつを自分からはつきりと言うようにしたいです。そして、周りの人達が、伊達市はいいなあと思ってくれるようにしたいです。そこから、周りの人達も自分から伊達市のために何かできる事はないかなと考えてくれるようになったら、うれしいです。そうしたら伊達市は、もっと笑顔あふれる地域になると思います。

二つ目は、自然を汚さない事です。ごみなどを道路などに捨てないのはもちろん、きちんと分別して出したいです。また、公園などに行つて、ごみがあつたら、拾うようにしたいです。そして、捨てようとする人には、注意できるようにしたいです。こんなささいな事でも、ちよつとは自然を守ることにつながると 생각합니다。

私は、この二つの事を今日から実行します。伊達市の一員ということとを忘れずに、ささいな事でもがんばりたいです。そして、悲しんでいる人の事を忘れずに、伊達市を支えて、自慢できるような故郷にしていきたいです。

未来へ残したいこと

桃陵中学校 二年 大橋 結依

私が住んでいる伊達市には、緑豊かな保原総合公園と、山車と太鼓で素敵なお祭りがあります。

小さい頃から、体を動かすことが大好きだったので、天気の良い日は公園に通っていました。そこには、長い滑り台があります。階段を登って行くこともできましたが、私は綱を登って行くことが得意でした。上に着くと高さに驚き、泣いて滑れない子もいました。でも私は、そこからの見晴らしが大好きでした。

三百六十度回転すれば、違う景色が広がりとてもきれいです。

夏になれば、芝生の近くに川が流れて噴水も上がり、とても人気の場所です。川が流れたすと夏が来ることを実感していました。服がビショビショになるまでよく遊んだことを今でも思い出します。

散歩やジョギングコースもあります。すれ違うと挨拶をかわすこともありました。人とのつながりをとっても感じられる、優しい公園です。大泉駅が見え、夕焼けの中、阿武急が走っている風景が私は大好きです。

秋になると、空にはとんぼが飛んでいたり、紅葉した落ち葉をよく拾ったりしました。だんだん風が冷たくなり、冬が来ます。季節を感じるができる公園です。

でも、原発事故が起こり、放射能汚染で外で遊べない時期は、とても辛かったです。少しずつ除染作業が進み、公園に行けた時は、おもいつき遊びました。

今では、遊具も増えて「だてな太鼓まつり」が開催されるようになり、皆が集まる場所になりました。

夏と秋に、神明宮夏祭礼と神明宮秋の例大祭のお祭りがあります。それぞれ二日間行われます。秋には山車が練り歩き、稚児舞が行われ夜には山車が集結し、太鼓競演をします。とても迫力のある太鼓です。私は、毎年友達と行きます。同級生の子たちが、太鼓を叩いている姿を見るととても羨ましいです。

近代化が進むなかで、お祭りもなくなってしまう時がくるかもしれませんが、続けていくことは大変なのかもしれませんが、次の世代とその文化をつないでほしいです。

保原総合公園は、子供からお年寄りまで皆の思い出がたくさんある公園だと思います。緑豊かな環境を守り、十年後も二十年後もこのままの状態を残してほしいです。

この伊達市に生まれ育つことができて、本当に幸せだと思っています。

地域の繋がり・小さな事から

月館中学校 三年 三浦 千穂

私は総合の時間に、月館を魅力ある街にするためにはどうするべきかをグループで考えました。

私達のグループでは、小中一貫校の開校により廃校となる小学校を利用して月館の特産品を売るというアイデアが出されました。私はそれを聞いて、その小学校に通っていた人達は卒業した後もしイベントに行くたびに学校生活のことを忘れないし、卒業生の間で思ひ出話に花を咲かせて楽しんでもらうことで、イベントに持続的に一定の人達が来場する上、一から会場を整備するよりコストも抑えられて、主催する側も、来場する側もプラスになるすごく合理的で現実的な案だと思いました。

この授業の最初の方は、中学生がこの街を活性化させるような現実的な案は出せるはずがないと思っていましたが、少し自分達の身の周りにある物について考えてみることで、思ったより具体的な案が出てきて、ネルソン・マンデラの「何事も達成するまでは不可能に見えるものである。」という名言はまさにこのことなのかな、と初めて実感しました。

例えば、普段気付かないだけで日々の生活の中に「地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくり」についてのヒ

ントはたくさんあるかもしれません。

例えば、安全・安心な地域を作っていこうとするのなら月に一回町内会でゴミ拾いや清掃をすればよいのではないのでしょうか。一見効果はあまり無さそうだと思われるかもしれませんが、たばこの吸い殻や空き缶などのゴミが無造作に放置されているような町は治安が悪い場合が多く、いつも清潔な環境が保たれている町はコミュニティ意識の高い人達が住んでいる場合が多いそうです。

そのような活動の参加を呼びかけたり、お手伝いをするのなら、中学生でも充分地域の役に立てると思います。一番町内の行事に参加しない世代は若い世代だと思うので、あまり繋がりのない若い世代とお年寄りの方々の世代の絆と信頼をつなぐ良い機会にもなると思います。

そうしてある程度地域の人達との繋がりを保っていると、その雰囲気も良くなってくるし、災害などの非常事態が起こった場合にも親しい人が周りに一人でもいてくれたら、精神的に助かり、いろいろ助け合うことができるなど、相手も自分も日々の生活を心地良く過ごすことができるに違いありません。

自分の周りの気になる物を世代の絆と信頼をつなぐことに役立てていきませんか。

講評

審査委員長 高野 保夫（伊達市教育委員）

伊達市の市民憲章作文コンクールが実施されるのは、昨年に続いて二回目になります。伊達市民憲章は学校も含めて公的な場所に掲示されていますが、前文と本文（五つのテーマ）とで構成されています。今年度は本文の二番目にあたる「つながましよう 世代の絆」とたしかな信頼を」というテーマでした。

募集要項の案内の文章では、その課題を受けて実際に作文をまとめる場合の参考のために、「伊達市には子どもからお年寄りまでさまざまな年代の人が住んでいます。皆さんは家族だけでなく、友達や地区に住む人などたくさんの人と関わりながら生活しているのではないのでしょうか。もっと伊達市を良くするために協力して出来ることや皆さんが安心して暮らせる伊達市になるために必要だと思われることなど、皆さんが感じることを自由に書いてみましょう。」という呼びかけがなされていました。

作文の募集は、小学五・六年生の部と中学生の部の二つの部門に分かれており、今年は市内の十五の小学校から二〇四名が、五つの中学校からは二〇七名の応募がありました。最終審査の対象になったのは、各学校から推薦のあった三十九点の作品でした。慎重に審査をした結果、最優秀賞には小・中学校各一名、優秀賞には小・中

各四名、佳作にも小・中各四名、合わせて十八名の皆さんが見事に受賞されることになりました。

まず、最優秀賞の二つの作品ですが、小学生の部門では、伊達小六年の大山 峻さんの「心から心へ——つながる絆——」が選ばれました。伊達中央交流館主催の自然体験学習や野菜づくりなどで学んだことを中心に、全体の構成を考えながら歯切れのよい文章でまとめたものでした。自らの体験や思考活動をいねいに振り返りながら文章を書き上げているところがすばらしいところです。中学生の部門では、伊達中三年の吉田桃香さんの「音楽を通して」という作文が最優秀賞になりました。梁川町を中心が始まった「オラトリオ」という音楽の一大行事を創り上げるため、地域のさまざまな世代の人々が協力し合ったこと、そして、その大切さについて書いた作文です。伊達市主催の行事に主体的に参加した体験を中心に、書くべき内容をよく整理し、主張したいことも明確にした文章で、今年度の市民憲章のテーマにふさわしい作品になっています。

次に、優秀賞の小・中学生の作品ですが、二つの傾向が見られました。一つは、地域に残る伝統的な行事を継承することの大切さやそれを維持する大変さなどについて書かれた作文です。もう一つは、地域の年間行事などを通しての交流活動から学んだこと、大人の人たちへの感謝の気持ち、協力の大切さなどについてまとめたものです。前者の作品として、「ふるさとのししまいを守るために」（大石小六年 大橋 陸）、「次の世代につなぐ太鼓祭り」（掛田小五年 長正

万穂)、「つなげる地元の伝統」(松陽中三年 野田勇希)、「世代の距離を無くす長岡天王祭」(伊達中一年 菅野美緒)が、後者の作品として、「地いきの人と関わるということ」(栗野小六年 渡邊凜咲)、「もつとみんなと関わって」(栗野小五年 佐藤滯)、「地域のつながり」(松陽中二年 関根葵)、「地域の絆」(月館中一年 齋藤颯斗)があげられます。

続いて、佳作となった小・中学生の作品についてです。「つないでいきたい伝承太鼓」(小国小五年 菅野忠遼)、「未来へ残したいこと」(桃陵中二年 大橋結依)には、地元の伝統的な行事や祭礼を大切にしたいという思いがあふれていました。また、「これからの小手を考える」(小手小六年 斎藤城宇)、「私の故郷」(松陽中一年 紺野真白)、「地域の繋がり・小さな事から」(月館中三年 三浦千穂)には、農村広場の活用や福祉体験活動、町内の清掃活動への参加の大切さなどが表現されていました。さらに、「世代のきずなを深めるために」(石田小六年 渡邊楓華)、「よりよい伊達市にするために」(上保原小六年 大橋青空)、「愛すべき伊達」(伊達中二年 渡邊ひなた)には、自分たちが住んでいる地域をさらによくするための具体的提言もいくつか込められていました。書きたい題材のしぼり方や具体的な体験の書き方などを工夫するとさらに良い作品になると思います。

次年度は市民憲章の第三文の「そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ち」ということがテーマになります。作文の中心にし

たいことは何か、作文全体の組立・構成をどうするか、自らの体験活動をどこで挿入するのがいいかなど、表現のしかたをいろいろ工夫しながら、ぜひ心のこもった文章を多くの皆さんに書いていただきたいと思っています。



伊達市民憲章

～心をひとつに～

わたしたちは、緑豊かなふるさとの歴史と伝統に誇りをもち、
協働の精神でさまざまな困難をのりこえ、
健康で安心して暮らせる活力ある「伊達なまちづくり」をめざし、
この憲章を定めます。

一 まもりましょう

ふるさとの自然と歴史を

一 つなぎましょう

世代の絆とたしかな信頼を

一 そだてましょう

支えあいと思いやりの気持ちを

一 きずきましょう

学ぶ心とゆたかな文化を

一 めざしましょう

すこやかで活力のあるまちを



市民憲章の解説

【憲章名】 憲章名を「伊達市民憲章」とし、副題の「心をひとつに」という言葉は、伊達市が合併したときの「伊達 織りなす未来ひとつの心」という表現に象徴されるように、旧町それぞれの個性を生かしつつ、「伊達市」として一体になろうという理念を継承したものです。

【前文】 本憲章は、私たちが誇りとする自然、歴史、文化、伝統を尊重・継承し、市民みんなの力で大震災、原発事故、人口減少に伴う社会問題などの困難を克服するとともに、地域も人も輝き、豊かで明るい未来をめざす伊達市の実現のために定めるものです。「伊達なまちづくり」には、誰もが健康で自分らしく生涯を過ごすことができるまちでありたい、という強い願いが込められています。

【本文】 子どもからお年寄りまで声に出して唱え、日々の暮らしの中で明確な目標を持ち、市民が協力、協調しながら実践しやすいよう、簡潔で親しみやすい表現にしています。「くましよう」という五つの呼びかけには、市民一人ひとりが主人公となり、希望あふれる伊達市の未来を積極的に創り上げようという思いが託されています。

一 まもりましょう ふるさとの自然と歴史を

豊かな自然環境と、先人が築いてきた歴史、文化、伝統を大切に守り、それらを生かしたまちづくりに努め、心豊かに生活できるふるさとの実現をめざします。

一 つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を

世代の垣根を越えて人々が連携し、望ましい信頼関係を築き、創意ある取り組みで地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくりをめざします。

一 そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ちを

自らを高め、地域ぐるみでお互いを支え合い、安心な子育てを実現し、住み慣れたふるさとで自分らしく明るく暮らせる社会づくりをめざします。

一 きずきましょう 学ぶ心とゆたかな文化を

教育や文化を尊重し、読書に親しみ、生涯を通して学べる教育環境を充実させ、広い視野に立って行動し、地域を活性化できる創造的な人材の育成をめざします。

一 めざしましょう すこやかで活力のあるまちを

健幸都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域も人も輝く活気あるまちづくりを推進し、地域の特色を生かした産業の振興・発展をめざします。



編集発行：福島県伊達市総務部総務課
平成31年2月